

日本人学生の海外留学志向

—留学動機と留学後のキャリアの観点から—

Japanese University Students' Orientation to Studying Abroad:

Their Motivations and Career Perspectives

香川大学インターナショナルオフィス講師 **正楽 藍**

SHORAKU Ai

(Lecturer, International Office, Kagawa University)

キーワード：留学志向と動機、留学とキャリア、海外留学

1. 大学の国際化と海外留学

大学の国際化とは何か（どうなれば大学は国際化していると言えるのか）。大学の国際化の定義としてよく引用されるナイト（Knight 2008、p. 21）によれば、大学の国際化は、「教育、研究、その他のサービスを含めてすべての大学の機能が国際的かつグローバルな状況や局面に統合される多面的なプロセス」である¹。大学が国際化されなければならない理由を大学の使命から考えてみる。広く言われる大学の使命は教育と研究、社会貢献である。吉見（2011、p. 258）によれば、大学は、「人と人、人と知識の出会いを持続的に媒介する」もの（領域）であり、「知を媒介する集合的实践が構造化された場」であると理解できる。大学は知識を創造し、伝達する。知識の創造が研究であり、その知識を次の世代へ伝達することが教育である。さらに、知識を適切に社会や国民の生活に還元することも求められる。我々の生活は好むと好まざるとにかかわらず国際化している。大学には、社会やそこでの我々の生活の改善に貢献できる人材を育成することが求められている。

国際化する社会で活躍しうる人材を育成するためには、大学はどのような知識や能力を学生に対して涵養すればよいのか。そのキーワードを国際系大学や学部のアドミッション・ポリシーやディプロ

¹ 日本語訳は横田・小林編（2013、p. 31）

マ・ポリシーに探ってみると、「(外国語による) コミュニケーション力」や「異文化理解力」、「自己や自文化の発信」の他、「地域」や「広範な教養と専門知識」等の用語が目立つ²。こうした国際系学部等では、海外留学を必須化したり、副専攻のなかに海外留学プログラムを置いたりしている³。国際系学部に限らず、日本の大学界全体において、学生の海外留学への機運を高めることの必要性がこれまでにないほど強調されている。改めて言うまでもなく、日本人学生の海外留学促進は政府と経済界のグローバル人材育成の提言を受けたものであり、大学は、学生に海外経験を積ませることにより、世界経済の前線で活躍できる人材を育成することを期待されている(横田・小林 2013)。もちろん、海外留学は大学の国際化やグローバル人材育成の十分条件ではない。しかしながら、海外留学では、コミュニケーション力や異文化理解力、世界諸地域に対する知識や理解、日本人としてのアイデンティティ等が表出されやすく、これらの知識や能力を備えていることがグローバル人材の素養と言われる。

では、肝心の日本人学生は海外留学をどのように考えているのだろうか。彼らは海外留学に何を期待するのだろうか。なぜ彼らは海外留学をためらうのだろうか。さらに、彼らの海外留学を促進するためには、大学はどのような教育的支援をするべきだろうか。本稿では、これらの点を考察する。まずは、日本人学生の留学動機を、日本人とは対照的に留学者数が急増している近隣諸国の学生の留学動機と比較しながら分析する。次に、日本人学生の海外留学志向(海外留学についてどのように考えているのか)、そして、その志向が形成される要因を分析する。最後に、日本人学生の海外留学を促進するために必要と考えられる、大学における教育的支援を考察する。

2. 日本及び近隣諸国の学生の留学動機

平成25年度の中国から日本への留学生数は81,884人で、第二位の韓国(15,304人)を大きく引き離して第一位である(日本学生支援機構 2014a)。平成10年度の同国からの留学生数が22,810人であったことから、その数は3.5倍以上である。日本以外の国や地域への留学生数も急増しており、UNESCOのInstitute for Statisticsの集計によると、中国から北米及び西ヨーロッパへの高等教育レベルの留学生数は65,886人(1999(平成11)年)から384,514人(2013(平成25)年)、同じ東アジア地域

² 朝日新聞社・河合塾(2014)「2014年度版「ひらく 日本の大学」データベース」登録の大学のうち、大学や学部・学科名に「国際」を冠しているものを抽出し、それらの大学の公式ウェブから検索した。

³ 筆者が平成26年8月から11月にかけて実施した、日本の四年制及び六年制大学に対する「学生の海外留学に関する大学調査」の結果、海外留学を必須とするコースや学科、学部を設置している大学は全国で67校(国立11校、公立5校、私立51校)、委員会やワーキング・グループ等で設置を検討している大学は26校(国立5校、公立2校、私立19校)であった。本調査の対象大学は769校、回答数は535校(回収率69.6%)。本調査における海外留学の定義は、その大学が、または海外の協定校等と共同で実施する数週間や2カ月程度の短期の研修から、1学期間や1年間の交換留学までを含む(当該大学が関与しない、学生個人での留学は除く)。

への留学生数は51,248人(1999年)から286,452人(2013年)へと急増している⁴。井口・曙(2003)は中国から日本への留学動機として、中国の急速な経済成長による家計の教育負担能力の向上、当時の円高傾向による期待所得の上昇、留学成功者の帰国の増加の3点をあげた。つまり、留学帰国者のサクセス・ストーリーを目の当たりにした中国人学生が、将来の高収入を期待して自らも留学へと踏み出すという構図である。

韓国から海外への留学生も同様に急増しており、日本への留学生数は11,467人(平成10年度)から15,304人(平成25年度)、北米及び西ヨーロッパへの留学生数は46,400人(1999年)から86,140人(2013年)へと増加している。特に、米国の大学(学部)で学ぶ外国人学生のうち、韓国人は中国人を凌いで第一位であり、その数は日本人学生の2.6倍である(岩淵 2013)。日本よりも一人当たりGDPの低い、かつ人口の少ない韓国から海外に出る留学者が多い要因はどこにあるのだろうか。岩淵(2013)は韓国人の留学、とりわけ、米国への留学動機として、米国の存在の大きさと在米韓国人の影響力、留学帰国者のサクセス・ストーリー、韓国企業の海外依存度の高さ(韓国経済の貿易依存度の高さ)をあげる。中国同様、韓国でも、留学成功者の存在が大きいことがわかる。海外留学を評価する風潮が経済界にあり、実際、留学経験者がより高く評価される結果となっていると推察される。

一方、日本人学生の留学動機はどうであろうか。松原ら(2008b)は日本人学生の留学動機に影響を及ぼす要因として、留学に対する保護者の態度(留学に反対する保護者を持つ学生の留学志向は低い)、留学先での知人や親戚の有無(留学先に知人や親戚を持つ学生の留学志向は高い)をあげた。留学に対する保護者の態度については、中国人学生にも同様の傾向が見られる(松原 2008a)。しかし、留学に伴うリスクを考慮してもなお留学を選択するという、いわばハイリスク・ハイリターンの傾向は、中国人学生には見られたが日本人学生にはあまり見られなかった。船津・堀田(2004)によれば、日本人学生の留学意志を決定するもっとも大きな要因は、その学生が過去に留学経験を持つかどうかである。すでに短期間でも留学した経験を持つ学生は、在学中の留学を希望する傾向にある⁵。さらに、中国や韓国の学生に見られた将来の期待所得と在学中の留学希望の正の相関について、日本人学生の場合、将来の所得への期待が高くないほど留学希望は強いという結果が出ている。

大学の国際化指標としてよく取り上げられる外国人留学生との関連から、河合・野口(2010、p. 78)は、留学志向の高い日本人学生は外国人留学生との相互交流を「具体的な個人的な体験」として取り込んでいると指摘する。外国人留学生数が増加したり、彼らと授業で机を並べたりするだけでは、日本人学生との相互交流は生まれず、留学志向を高めることも期待できない。日本人学生は、日本語での専門分野の授業へ積極的に参加する外国人留学生の姿に刺激を受けたり、自分との英語力の差を目

⁴ ここで言う東アジア地域とは、東南アジア諸国を含む東アジア及び大洋州地域を指す。

⁵ 大学の交流協定等にもとづく3カ月未満の極短期の留学生数が近年増加傾向にあり(7,684人(平成13年度)から29,553人(平成24年度))、船津・堀田(2004)に従えば、こうした極短期の留学プログラムには大きな期待を寄せるべきであると言える(文部科学省 n.d.; 日本学生支援機構 2014b)。

の当たりにしたりすることによって、留学への意識を高めていくのである。河合・野口（2010）の分析でさらに興味深いことは、大学生活の満足度と留学志向の関係である。留学志向の高い学生は、学生生活への満足度が高い反面、大学での講義に対する満足度は低い。彼らは海外の大学等で行われている講義や研究環境についての情報を持っており、日本の大学でのそれと比較することで、日本の大学での講義に対する満足度が低くなる傾向にある。

日本や近隣諸国の学生が海外留学を検討する際、留学先として先ずあがるのは米国や英国等の英語圏、西ヨーロッパであろう。しかし近年、東アジア地域内の留学も増えてきている⁶。嶋内（2014）は東アジア地域から日本と韓国の大学の英語プログラムへ留学している学生の留学動機を分析した。そこでは、東アジア地域への過去の留学経験や同地域出身の学生との出会いが強い動機となっていること、「留学するなら英語圏」という一般からあえて外れたいというパイオニア精神が動機となっていること、また、西ヨーロッパ英語圏への留学の「準備」として東アジア地域への留学を選択していること等が述べられている。

ここまでの議論を整理すると、次のことが言える。第一に、日本人学生は在学中の海外留学を将来の収入増加の手段と捉えない傾向にある。中国や韓国での事例研究から推察すると、両国では留学帰国者のサクセス・ストーリーが広く語られるのに対して、日本ではその傾向は見られない。第二に、過去に留学経験を持つ日本人学生は在学中の留学を希望する傾向にある。過去の留学で経験したコミュニケーション力や自文化発信力の不足、留学先の人々とのつながりが次なる留学を後押しするのである。第三に、日本の大学生活における外国人留学生との個別具体的な相互交流や海外の大学等の教育研究環境の情報は、日本人学生の留学志向の高さと関連がある。

3. 日本人学生の留学志向

3-1. 調査方法

前節での議論を踏まえて、本節では、日本の四年制大学で学ぶ日本人学生の海外留学志向（海外留学についてどのように考えているのか）、そして、その志向が形成される要因を分析する。本節のデータは、筆者が平成24年11月から平成25年4月にかけて、地方国立大学（以下、A大学）の学部生を対象に実施したアンケート調査及びインタビュー調査によるものである。

A大学は昭和20年代に創立され、現在、6つの学部と9つの研究科を持つ総合大学である。調査当時の学生数は約5,700人（学部生）と約890人（大学院）で、そのうち、外国人留学生数は約180人である。調査当時、A大学は世界各国の約40の大学等と学術交流協定を締結していた。平成23年度

⁶ 1999年から2010年の変化を見ると、例えば、日本から韓国への留学生数は551人から1,147人、日本から東南アジア諸国連合へは242人から604人、東南アジア諸国連合から韓国へは170人から3,499人へと急増している（北村 2015）。

の日本人学生の留学者数は合計約 200 人であったが、留学期間は数日間の極短期の留学から 1 学期間や 1 年間の交換留学までさまざまである。留学先の上位はタイや韓国、米国、中国及び台湾、オーストラリア、ドイツ、フランス等である。

アンケート調査は A 大学の教養科目を受講する学生を対象に実施した。教養科目を受講する学生を対象にした理由は、これらの科目を受講する学生の多くが 1 年生であり、4 年間の大学生活のなかで海外留学をどのように位置づけているのかを考察することが可能と考えたからである。アンケート調査票のなかでインタビュー調査への協力を依頼し、インタビュー対象者は協力依頼に応じてくれた学生のなかから抽出した。表 1 と 2 はアンケート調査とインタビュー調査それぞれの回答者を表したものである。

表 1. アンケート調査の回答者一覧

性別	男	139 (140)
	女	132 (133)
	欠損値	1
学年	1 年生	252 (255)
	2 年生	10 (10)
	3 年生	7 (7)
	4 年生	1 (1)
	その他	0 (0)
	欠損値	1 (1)
合計		271 (274)

() 内の数値は全回答者数⁷。

表 2. インタビュー調査の回答者一覧

ID No.	性別	学部	学年	層
A- 4	女	工学部	1 年生	未準備層
A- 72	男	法学部	1 年生	準備層
A- 77	女	経済学部	1 年生	未準備層
A-207	女	法学部	1 年生	未準備層
A-212	女	医学部	3 年生	未準備層
A-232	女	経済学部	1 年生	未準備層

⁷ 回答者 274 人から外国人留学生を除く 271 人を分析の対象とする。271 人のなかには、日本国籍以外の学生で、日本人学生と同様の一般入学試験を受験して A 大学の正規課程に在籍する者が含まれる。本稿では、これらの学生も含めて、「日本人学生」と言う。

アンケート調査では、回答者の基本属性を尋ねた後、彼らの留学予定を尋ね、「すでに留学を決めている（積極層）」と「留学をしたいと考えており、かつ、何らかの準備をすでにしている（準備層）」、「留学をしたいと考えているが、特に準備はしていない（未準備層）」、「留学について考えていない、または、留学するつもりはない（消極層）」の4層に分類した⁸。分類の結果、積極層5人、準備層13人、未準備層88人、消極層165人となった⁹。表2の右端の「層」は各回答者の層を指す。

3-2. 海外留学と職業

近隣諸国の学生と比較して、日本人学生は海外留学と将来の収入増加とを関連づけにくい傾向にある。彼らは、海外留学で得られる知識や能力と自己のキャリアとの関連をどのように捉えているのだろうか。そこでアンケート調査で、「海外留学は、将来の職業に関連する（役立つ）と思いますか？」と尋ねた。表3は回答結果を表したものである。

表3. 留学予定と留学と職業のクロス表

		留学と職業					合計	
		非常に関連する	ある程度関連する	あまり関連しない	全く関連しない	わからない		
留学予定	積極層	度数	1	4	0	0	0	5
		%	20.0%	80.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
	準備層	度数	7	4	2	0	0	13
		%	53.8%	30.8%	15.4%	0.0%	0.0%	100.0%
	未準備層	度数	26	46	5	1	4	82
		%	31.7%	56.1%	6.1%	1.2%	4.9%	100.0%
	消極層	度数	26	96	23	2	15	162
		%	16.0%	59.3%	14.2%	1.2%	9.3%	100.0%
合計		度数	60	150	30	3	19	262
		%	22.9%	57.3%	11.5%	1.1%	7.3%	100.0%

有効数 262 (96.7%)、欠損値 9 (3.3%)

「非常に関連する」と「ある程度関連する」を合わせると 210 (80.2%) で、回答者は、海外留学は将来の職業に関連する（役立つ）と考える傾向にある。両者の関連をどのように捉えているかを尋ねたインタビュー調査では、A-212 は次のように答える。

最終的には、その、海外の JICA とか国境なき医師団とか、そういうので働けるためにも、語学を勉強してスキルを身につけてっていう面で留学とつながっています。

⁸ 層の分類は近森（2006）による3層への分類を参考にした。

⁹ この分布割合は類似の先行研究（河合・野口 2010）と若干異なるが、筆者と共同研究者による他の地方国立大学での調査結果とは同様の傾向である（正楽他 2013）。

(A-212)

A-212は、海外留学は将来の職業に「非常に関連する」と答えている。この学生は国際協力の分野で働きたいと考えており、留学によって、国際協力の世界で必要とされる語学力や専門知識及び能力を獲得しようと考えている。

アンケート調査で留学目的を尋ねると、語学力の向上は留学目的の上位である一方、専門知識の向上を留学目的と考える回答は少ない¹⁰。しかし、インタビュー調査で掘り下げて尋ねると、語学力は留学で獲得したい能力ではあるが、それだけで終わりたくはない。高い語学力を駆使して身につける専門知識や能力がなければ、留学を将来の職業へとつなげることはできないことを理解していると推察される。アンケート調査の結果のみからは、学生の留学目的は語学力の向上に集中しているように思われたが、インタビュー調査の結果と合わせて分析すると、語学力の向上を達成したうえで専門知識や能力の向上に励み、それらを将来の職業へつなげたいと考えていると言えよう。このことはA-77の回答からもうかがえる。

今は語学だけの留学はもったいないかなっていう。だったら、なんかもっと将来の仕事に関係することも一緒に勉強できるような。そういう留学がしたいなって思うようになりました。

(A-77)

表3を見返すと、積極層は全員、「非常に関連する」または「ある程度関連する」と回答しているのに対して、未準備層や消極層のなかには、「わからない」やわずかながら「全く関連しない」と回答する学生がいる。これは何を意味するのだろうか。留学について考えていなかったり、留学するつもりがなかったりするから、留学と将来の職業との関連についても考えたことがないのだろうか。自己のキャリアのなかに留学を位置づけたことがないのかも知れない。

3-3. 過去の留学経験

日本人学生の留学意志を決定する大きな要因として、過去の留学経験が指摘されている。ここでは、留学志向の程度を表す各層と過去の渡航経験の関係について、さらに、過去の渡航経験の内容について分析する。アンケート調査で、「あなたはこれまでに海外へ行った経験(=渡航経験)がありますか？」

¹⁰ 「消極層」以外の3層の回答者に、「留学の目的は何ですか？」と尋ね、「専門の知識を高めるため」と「語学力の向上のため」、「将来の職業に役立てるため」、「異文化に接し、その理解を深めるため」、「その他」のなかから2つまで選択してもらった。その結果、「専門の知識を高めるため」を選択した回答者は9人、「語学力の向上のため」は66人、「将来の職業に役立てるため」は25名、「異文化に接し、その理解を深めるため」は67人、「その他」は6人であった。

と尋ねた。表4は回答結果を表したものである。

表4. 留学予定と渡航経験のクロス表

		渡航経験		合計	
		あり	なし		
留学予定	積極層	度数	3	2	5
		%	60.0%	40.0%	100.0%
	準備層	度数	5	8	13
		%	38.5%	61.5%	100.0%
	未準備層	度数	40	47	87
		%	46.0%	54.0%	100.0%
	消極層	度数	35	129	164
		%	21.3%	78.7%	100.0%
合計		度数	83	186	269
		%	30.9%	69.1%	100.0%

有効数 269 (99.3%)、欠損値 2 (0.7%)

約7割(69.1%)の回答者が「渡航経験なし」であり、層ごとでは、消極層での明らかな偏りが確認される。積極層では、「渡航経験あり」と回答した学生の方が多いのに対して、その他の層では、「渡航経験なし」と回答した学生の方が多い。このことから、過去に海外へ行ったことのある学生は在学中の留学を積極的に捉えている傾向にあると言え、先行研究の結果を支持している。

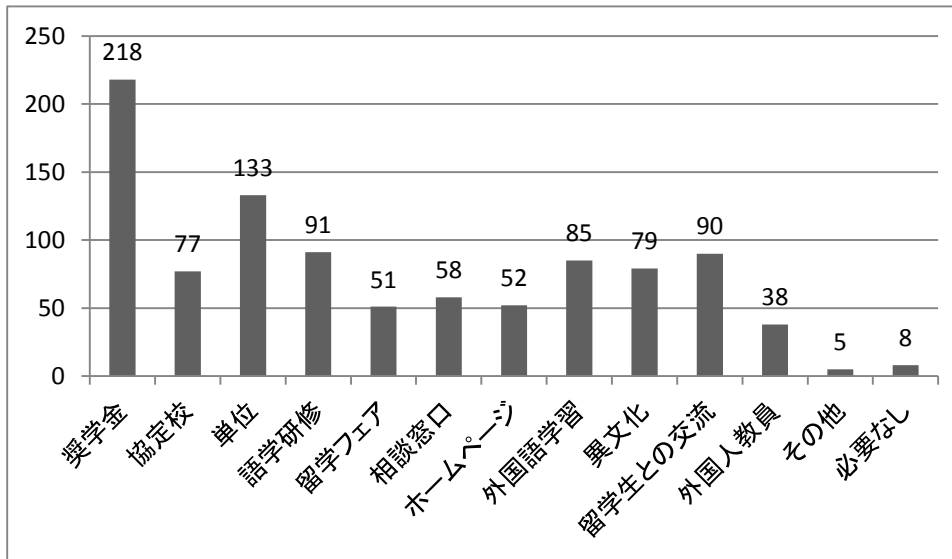
「渡航経験あり」と回答した学生83人に、「どのような渡航経験ですか?」と尋ね、「海外旅行/観光旅行」と「語学研修」、「国際交流活動」、「海外ボランティア活動」、「交換留学、または留学」、「その他」のなかから該当するものをすべて選択してもらった。さらに、各経験の渡航先(国)と期間、時期を記述してもらった。その結果、「海外旅行/観光旅行」を選択した学生がもっとも多く、「海外ボランティア」がもっとも少なかった¹¹。海外への渡航経験を持つとは言え、研修や留学等、特定の活動を行うことを目的として海外へ行ったのではなく、レジャーとして海外を経験しているに過ぎないという特徴を確認できた。ここで、海外旅行も海外留学への意識を高める要因となるのか、なるとすれば、海外旅行のどのような要素が留学を後押しするのかという疑問が湧く。海外での異文化への接触や日本人としてのアイデンティティの目覚めは、旅行よりも留学で経験するものであろう。異文化への接触やアイデンティティの目覚めが次なる留学へとつながるのであれば、留学志向と「渡航経験あり」、「海外旅行/観光旅行」との関連についてはさらなる調査が必要である。

3-4. 海外留学と現在の大学環境

¹¹ それぞれ、「海外旅行/観光旅行」は58人、「海外ボランティア」は0人であった。他の選択肢は数の多い順に、「語学研修」、「その他」、「国際交流活動」、「交換留学、または留学」である。

先行研究の分析によると、外国人留学生との個別具体的な相互交流を経験している学生の留学志向は高く、海外の大学等の教育研究環境の情報を持つ学生の留学志向も高い。ここでは、A大学の調査対象の日本人学生が、大学に対して、どのような留学促進制度を期待しているのかを分析する。図1は、「あなたは、A大学の海外留学を促進させるために、どのような制度の充実が必要だと思いますか？（該当するものをすべて選んでください）」というアンケート設問への回答結果である。

図1. A大学へ期待する留学促進制度¹²



有効数 268 (98.9%)、欠損値 3 (1.1%)

奨学金の充実を求める声が圧倒的に多い。次いで、「A大学を休学して、協定校以外の大学に留学した場合の単位認定制度」の充実と続く。A大学には、海外留学の促進及び経済的支援を目的とした大学の独自資金（奨学金）がある。大学の推薦を経て給付される JASSO や財団等の奨学金も広く案内されている。しかしながら、218人（81.0%）が奨学金の充実を求めている。これは、回答者の多くがこれらの奨学金の存在を知らないのか、存在を知っていてそれでもなおさらなる充実を求めているのか、どちらであるかはこの回答結果から知ることはできない。

消極層以外の層（積極層と準備層、未準備層）に対するアンケート調査で、留学を実現させるうえで想定される問題（留学の実現を困難にする問題）とその程度を尋ねたところ、留学の費用を問題視

¹² 図中の「奨学金」はアンケート調査票では「奨学金」と表記している。以下、それぞれ、「協定校」は「交換留学の協定校の増加」、「単位」は「A大学を休学して、協定校以外の大学に留学した場合の単位認定制度」、「語学研修」は「短期語学研修など、交換留学以外の海外留学制度」、「留学フェア」は「学内の海外留学フェア等の開催」、「相談窓口」は「学内の海外留学相談窓口の増設」、「ホームページ」は「海外留学のためのホームページ等ネット情報」、「外国語学習」は「学内の外国語学習のための支援」、「異文化」は「異文化に適応する能力を向上させるためのプログラム」、「留学生との交流」は「外国人留学生との交流の機会」、「外国人教員」は「外国人教員の増加」、「必要なし」は「制度の充実は必要ない」である。

する回答者が多く、その程度も高かった。一方、層ごとに結果を見てみると、積極層と比較して、準備層や未準備層の方が留学の費用をより深く問題視する傾向にあった。

これら2つの設問の結果を合わせると、留学を実現させるうえでその費用は重要な問題である、したがって、大学に対しては、経済的支援（奨学金）の充実を求めているとすることができる。

外国人留学生との交流についてはどうであろうか。図1では、「外国人留学生との交流の機会」の充実を求める声は、「A大学を休学して、協定校以外の大学に留学した場合の単位認定制度」に次いで多い。本節冒頭で既述のように、当時A大学で学ぶ外国人留学生数は約180人であった。彼らの出身国や地域もさまざま、授業やそれ以外の場で外国人留学生と接する機会は少なくない。それでもなお、外国人留学生との交流の機会の充実を求めるとはどういうことなのだろうか。日本人学生は、外国人留学生との交流に何を期待しているのだろうか。インタビュー調査の対象者のうち、唯一の準備層であるA-72は次のように語る¹³。

自分の高校に、留学生が来たんですよ。そういう人たちに触れ合ってみて、なんか、自分達と考え方が違うなあ、もっと、こういう人達のこと知ってみたいなーって思って。で、留学のことを考え出しました。(フィリピン出身の大学での友人は) すごくおおらかで、自分の意見も、とつても広く、視野が広いです。で、自分の意見も思ったことは素直に言って。何というか、とても楽しそうに毎日送っているように見えます。

(A-72、筆者括弧追記)

彼は外国人留学生との出会いを通じて新たな価値観に触れ、自分との違いを見せつけられた。同年代の友人が自分とは異なるものの見方や広い視野を持っている。同じ大学で学びながらも、なぜ彼らは自分とは違うように見えるのだろうか。彼らにあって自分にはないものとはいったい何だろうか等と考えるのかも知れない。

他方、同じ日本人学生ではあるが、留学を経験している学生に対する視線はどのようなものであろうか。

その人たち(留学経験を持つ友人)に近づく感じのイメージだったんですよ。(その友人のFacebook等を) 見ている、やっぱり羨ましいなあって思いながら。

(A-207、筆者括弧追記)

¹³ 彼はこのインタビュー後の夏、約2週間の海外研修(タイ)へ参加しており、彼が「準備層」となるのは、インタビュー当時、この研修のための授業等を受講していたからである。

たぶん、そう（留学によって卒業が遅れたとしても、将来には大きく影響しない）。（留学した）先輩を見て、すごく自分のやりたいことをやって、そうなっている（卒業が遅れた）わけだから、それに対して全く何も感じてないし。逆に私には、すごいいきいきしているようにも見えました。

（A-232、筆者括弧追記）

A-207は、留学経験を持つ友人への羨望によって留学意欲を高めており、A-232は、留学経験を持つ先輩を見て、留学による就職活動へのリスクは大きくないと思いつている。A-232は将来、途上国で働きたいという目標を持っている。彼女のように、将来の目標を持ち、その目標をかなえるためには在学中に何をすべきかを考え、そのなかに留学を位置づけられている学生は、留学によって卒業や就職が遅れることは大きな問題ではないと考える傾向にある¹⁴。それは、留学を経て納得の行く就職を果たした先輩の姿を見ているからである。このように、同年代かつ同じような環境で学ぶ友人や先輩の姿を目の当たりにすることで留学の具体的な効果を感じ、留学意欲を高めるのである。

4. 日本の大学生の海外留学促進に向けて

本稿の分析で次の点が明らかとなった。第一に、日本人学生は、海外留学は将来の職業に関連すると考える傾向にあり、その傾向は留学志向の高い学生ほど強い。彼らが留学と職業を関連づけて考える理由は、外国語の運用力の獲得もさることながら、外国語を通して身につける専門知識や能力が将来の職業とつながっていると信じるからである。第二に、過去の渡航経験の有無と留学志向の高低は関連がある。しかし、海外経験の何が留学志向に影響を与えているのかは、今回の調査では明らかにされなかった。第三に、日本人学生の留学志向と同年代の他の学生（外国人留学生及び日本人学生）からの影響は関連がある、しかしそれは、日頃から外国人との接触を意識的に行っていたり、留学について少しでも考えていたりする学生に限ってのことである。留学に対する意識の低い学生が外国人留学生や留学経験を持つ先輩らと接触したところで、大きな効果は期待できない。

以上の結果を踏まえて、最後に、日本人学生の海外留学を促進するために必要と考えられる、大学における教育的支援を提案したい。まず、近年増加している極短期の海外留学プログラムのなかに、専門知識や能力の獲得を意識した要素を取り入れることである。外国語の運用力の向上のみでは、学生の留学への期待に応えたり、極短期の留学後の次なるステップへつなげたりすることはできない。留学志向の比較的高い学生は、留学は目的ではなくキャリア形成のための手段であることを十分理解している。大学は、彼らの期待や目標にかなう教育事業を展開しなければならない。次に、外国人留学生や留学経験者等、身近な等身大のモデルとの個別具体的な学びの場を設定することである。外国

¹⁴ A-232はその後、日本政府の奨学金を得て、約1年間の留学を果たしている。

人留学生との交流パーティや、海外留学を促すパンフレット等での先輩の体験談掲載で終わるのではなく、彼らと日本人学生とが密に対話できる環境を設定することが重要である¹⁵。

参考文献

- 朝日新聞社・河合塾（2014）「2014年度版「ひらく 日本の大学」データベース」、河合塾。
- 井口泰・曙光（2003）「高度人材の国際移動の決定要因—日中間の留学生移動を中心に—」『経済学論究』57（3）：pp. 101-121.
- 岩淵秀樹（2013）『韓国のグローバル人材育成力—超競争社会の真実—』、講談社現代新書。
- 河合淳子・野口剛（2010）「日本人学生の留学志向に関する実証的研究—京都大学学生アンケート・インタビュー調査にみる「留学志向の三層構造」—」『留学生交流・指導研究』12：pp. 69-81.
- 北村友人（2015）「東アジアにおける高等教育の国際化を通じたグローバル人材育成—「知識外交」への貢献を見据えて—」ウェブマガジン『留学交流』2015年1月号：pp. 11-21.
- 嶋内佐絵（2014）「何故、英語プログラムに留学するのか？—日韓高等教育留学におけるプッシュ・プル要因の質的分析を通して—」『教育社会学研究』94：pp. 303-324.
- 正楽藍、杉野竜美、武寛子（2013）「大学生の海外留学に対する意識の形成要因—日本の四年制大学における比較分析—」『香川大学インターナショナルオフィスジャーナル』4：pp. 19-45.
- 近森高明（2006）「留学志向の三層と留学支援のあり方—積極派・消極派・浮動層のプロフィールを手がかりに—」『京都大学における国際交流の現状と可能性—第2回アンケート調査報告書—』京都大学国際交流センター：pp. 43-56.
- 船津秀樹・堀田泰司（2004）「海外留学に関する意思決定問題」『商学討究』55（1）：pp. 89-108.
- 松原敏浩・李晨・姜輝（2008a）「大学生の留学意思決定に及ぼす要因の分析(1)—中国山東省の国立大学学生の場合を事例として—」『経営学研究』7（4）：pp. 237-248.
- 松原敏浩・薛曉梅・李晨・姜輝（2008b）「大学生の留学意思決定に及ぼす要因の分析(2)—日本の大学生と中国の大学生の比較を通して—」『経営管理研究所紀要』15：pp. 87-99.
- 日本学生支援機構（2014a）「平成25年度外国人留学生在籍状況調査結果」（平成26年3月）。
- 日本学生支援機構（2014b）「平成24年度協定等に基づく日本人学生留学状況調査結果」（平成26年4月）。
- 文部科学省（n.d.）「協定等に基づく日本人学生留学状況の推移」 <
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/020/gijiroku/08052004/006.pdf>

¹⁵ 外国人留学生や留学経験者の側から見ると、彼らは、日本の大学キャンパスではマイノリティである。留学から帰国後、日本での大学生生活のなかで孤独感や孤立感を抱えている留学経験者は少なくない。留学へあと一歩踏み出せずにいる学生との学びの場の設定は、留学経験者に対する留学後の教育指導としても重要である。

(2015年1月16日アクセス).

横田雅弘・小林明編 (2013) 『大学の国際化と日本人学生の国際志向性』、学文社.

吉見俊哉 (2011) 『大学とは何か』、岩波書店.

Knight, Jane (2008) Higher Education in Turmoil: the Changing World of Internationalization, Sense Publishers.

UNESCO Institute for Statistics <<http://www.uis.unesco.org/Pages/default.aspx>> (2015年1月15日アクセス).